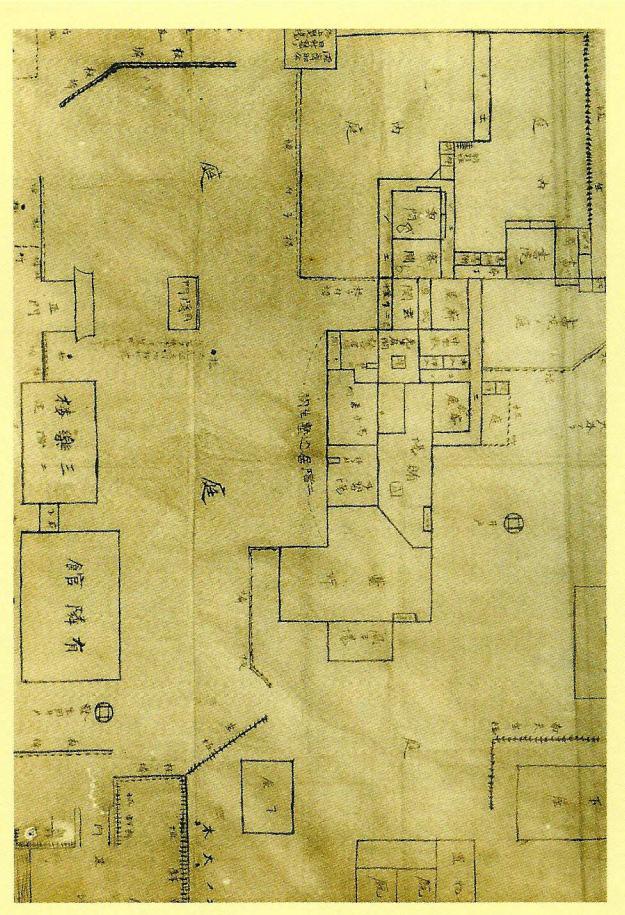


取り壊される前の日新塾母屋（再建）
（文化5年（1808年）の年号のある棟札。見られたもので、父久泰の時代からの屋舎が近頃残つて正門左側にあつた屋舎がある様子。）

幕末・維新の激動期に生きた門人の中には、現状打開を叫んで政治運動に挺身した者もいたが、その多くは農村社会に着実に根を下ろして家業に励み、教育に出精し、砂山から受けた学問と精神を各地に伝えていた。
砂山は医学にも深い関心を示し、書庫には多数の医書を蔵し、医者の研修にも多くの便宜を与えていた。
砂山は医学とともに、武術では剣術・砲術・馬術・教練の各科を教じての講義、學生同士の論説・論読・討論会などを許さなかつた。学生芸では読書・習字・作文・地理・歴史・数学・兵学のほか、日常生活や時事問題を話題とし、日々の多彩な点でも塾の追隨を

学芸、武芸、医学…多彩な教育科目

日新塾で使用された教科書の一冊（明治10年の火災で焼失を免れた蔵書1,824冊があり、茨城県立歴史館に寄贈、保管されている）



日新塾の図面（弓野國之介著「龍正五位加倉井砂山先生略傳」より転載）

加倉井家は、成沢村で祖父の代から郷士（農村居士）である。その規模から見ておそらく北関東随一と称してよからう。成沢町の自宅に開いた私塾。農村の私塾としては最も有名な號をもつが茨城郡成沢村（水戸市）の「立卿」（りきよ）は、加倉井砂山（一八〇五～一八五五）。諱は久義雍（くぎゆう）。不知老焉などの號をもつてゐる。

加倉井砂山と日新塾

かくらいさん